

古文書を読む会学習記録

作成日 令和 1年10月 8日

開催日	令和 1年 9月26日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センター	受講者	14名
講 師	真田 雅行氏	作成者	堀井 克子
テーマ	第二学習 北槎聞略(大黒屋光大夫漂流記録)巻三		
	<p>北槎聞略のクライマックスの場面。イルクーツクから一か月の長旅の後、首都ペテルブルグに到着し、近郊の夏の離宮でロシアの支配者エカテリーナ二世（女帝）に拝謁した光大夫はこれまでの苦難の漂流の様子などを話して重ねて日本への帰国を懇請した。これを聞いて女帝は“おゝ・ジャールコ”（あゝ何てかわいそうな）と叫んだ。この女帝との面談の実現にはイルクーツク以来親切に面倒をみているキリル・ラクスマンの力添えが大きい。以下はそれまでの経緯の概略である。</p> <p>○イルコツカは人家三千余、繁華の地、支那、朝鮮、満州等の人交易に出入りしている。知人となる郡官、官事との係わり、この地の国司イワンエレヘレウィヒピイリ、エネラルポロッチクの官人（いずれも女帝の側近）まで帰国の願い状を出す。</p> <p>○庄蔵の足の患い、湿毒が到着後十日後、更に悪くなり治療。しかし片足切断。その後ヒヨドロステッパウイチソテフコフと改名しロシア正教に帰依。</p> <p>○光太夫へ士官の誘いがあり家作等厚遇の内容の提示があるが、この恩恵を断り、同月七日、帰国の願い状を出す。</p> <p>○九右衛門病死。十三日丑の刻。</p> <p>○十五日イルコツカを出発、同行キリロ二男アパナシ、手下共に一行五人そりで旧都ムスクワを経て千八百二十三里の路程経て同月二月十九日ペートルポルグに着。</p> <p>○キリロ重病。光太夫昼夜付き添い看病、弟夫妻も看病し漸く快気。</p> <p>○新蔵、庄蔵共にイルクーツクで日本語の教師となる。</p> <p>○女王、皇孫に拝謁の礼。光太夫はキリロを伴い小袖羽織袴の衣服を取り揃え正殿に向かい慶賀の御膳に。</p> <p>（これまでの帰国願書はペテルブルグのとある高官のところで留められていたことが女王の糾問で判明した。）</p>		
次回予定	令和 1年 10月10日 14:00~16:00 於:区民活動センター 第一学習 磯子村区久木 堤家文書①		